

〈特別寄稿〉

桃 李 満 園

金子曾政

待望の総合移転が始まった。文法経三学部、大学会館、図書館等、勇躍先陣を切って新天地に新しい生命を吹き込んでいる。草創の頃に関係した者の一人として感なきを得ない。



私が学長に就任した昭和54年には法文学部の分離改組と、それに伴う総合移転の問題は既にあったが、学内学外の空気はなおすっきりしたものではなかった。12月1日の法文学部同窓会では『孟母の夢を』と題して「…四百年の伝統が培った環境が勉学に最も適しているとするならば、創造を生命とする大学が、それに甘え、それを独占してよいはずはありません。大学の往くところ、大学のあるところ、いつでも、どこでも、常に最良の教育的環境が醸し出されるのでなければ孟母三遷の夢は叶えられないことになりましょう。…」などと挨拶している。幹事に原稿を見せていたので、騒ぎを起こさぬように全員の諒解を得るまで控室で待たされたりした。純情一途の学長にみんな苦勞したようである。

11月20日の評議会では議論百出、時間切れ寸前に総合大学の機能を十分發揮し、将来計画を逐次実現するため総合移転の方針を堅持するが、その第一段階として当面の城内部局の移転計画に合意することを評議会の総意を以て決定した。かくして法文学部の分離改組は成ったが、移転の具体的問題になるとさっぱり会議は進まなかった。

三学部創設記念祝賀会は55年4月30日、学生会館で開かれた。城外への移転問題を控え、微妙な空気のなかで私はツェノンの逆理を引用して、旧態依然とした考え方に囚われず、現実と理想を正確に把握して、いつまでも亀に追い付けないと自縄自縛に陥らないで、三学部がそれぞれの特質を發揮しつつ緊密に協力し、世界に向かって金沢文化の華を咲かすべく、建設の槌を揮われんことを期待して祝辞とした。

法文学部の分離改組が実現すると、その前提となる総合移転の予算を請求しなければならない。具体的な案となると会議は遅々として進展せず、夜遅くまで、ときには明け方までかかることもしばしばあった。移転実施特別委員会の終了を待っていたある日、夜の10時頃、記者諸君と雑談中に鼻出血があって醜態を演じたこともある。「先生はもう覚悟しているんじゃないでしょうね」とささやかれたりした。せっかくなついた3億円も返上のやむ無きに至り、もともと心進まなかった学長職、秘かに引責辞職の意を固め、身の整理を始めたが、事務局は言を左右にして手続きを延引した。

そのうちに城内狭隘の実状は日々に顕著になり、一方移転反対者は開き直って大学の前途は暗澹たるものとなると、反って私は元氣を取り戻した。移転で苦勞した、あるいは苦勞している各大学を、東北から琉球までつぶさに見学し、明日の金沢大学の為にこそ命を

捨てるべきだと思った。
く…大学が、発展もせず、滅びもせず、伝統の内に古い暖簾だけを誇ってよいものならば、石川門のうちに潜んで名門校となるもよいであろうが、所謂地方の基幹大学に、さらに世界に雄飛する人材を育てようとする遠大な理想を以て、自ら生生発展を遂げんとするならば、

城門を開いて広い天地を求める日が来るのは必然の運命である。…>などと事務通報号外に書いている。

昭和56年は私にとっても運命の年であった。3月は4回の評議会があった。時間的に追いつめられていた20日には前日のめまいで心配であったが、学長所信を読みあげて議員一人ひとりの意見を聞いた。5月には正式の議題として改めて賛否の決を採った。歴史的な第400回評議会ではく大学の基本的態度に基づき、角間地区約200ヘクタールをめざす第一段階として、城内全部局に見合う91ヘクタールの土地取得を57年度概算要求として提出する。…>となった。そして移転順序を文・法・経・図・理・教育・教養と明記した。会議は3時間40分、順調に終わった。そして今日のよき日を迎えたわけである。



あの多難の時代、不器用な私を支えてくれた教職員を忘れることはできない。移転の次は大学院であるが、これはむしろ楽しかった。落ち着くにつれて、移転に異論を唱えた人たちも、学生と学問に対する純粋無垢な熱情の



▲ 角間キャンパス

致すところと理解できるようになった。学内外の有志の意見も務めて拝聴することにした。みんなよく分かってくれた。

世間知らずの素人の、しどろもどろの6年間ではあったが、文武両道の高潔の士、本陣学長が萬遺漏なく軌道に乗せて晴れの今日の日を迎えた。移転に大学院、これからも難しい問題はいっぱいあるであろうが、練達の士青野学長が鮮やかに裁いていかれることであろう。それにつけても法文学部時代は陰の存在だった経済学部が、分離改組と共に堂々と独立学部の看板を掲げ、総合移転の初陣を飾っている。経世済民、人間社会を動かすものはやはり経済であろう。研究の進展をこそ祈りたい。

もう6年前になるが、当時中国の日本文学研究会会長林氏が金沢へ見えたとき、『桃李満園』なる言葉を寄せられた。＊桃李言わず、下自ら蹊を成す、新しい学園が慕い寄る内外の学徒で満ちわたる日を待ちたいものと思っている。

(元 金沢大学長)